

# 行為内意図は存在するか

佐藤 広大 (Kodai Sato)

慶應義塾大学・日本学術振興会特別研究員 DC

本発表の主題は「意図」である。日常言語のなかで「意図」は「～することに決める」、「～するつもり」、「～しよう」などと表現されるだろう。

意図に関する従来の理論 (Davidson 1980 など) はいくつかの点で批判されてきた。ここでは三点挙げよう。第一に、意図的に行為するとき、その行為をすることに決めてから行為しているとはかぎらないことである。たとえば、すれ違いざまに会釈するとき、会釈することに決めてから会釈しているわけではないだろう。しかし、会釈は意図的行為である。すると、会釈することに決めずに、つまり、会釈することを意図せずに、意図的に会釈していることになるのだろうか。もし意図せずに意図的行為をすることができないのだとしたら、従来の理論はこの事例を説明できていないことになる。第二に、従来の理論は行為が始まる時点までに注目していて、行為が始まってから完了するまでの期間には注目していないことである。「～することに決める」ことは多くの場合、行為が始まるまでになされるため、従来の理論は行為が始まるまでに注目していた。第三に、従来の理論が逸脱因果を処理できないことである。逸脱因果とは次のような事例である。太郎は建物の陰から飛び出して花子を驚かせることを意図する。そのように意図したことが原因となって、太郎は自分が花子を驚かせることができるかどうか不安になり、建物の陰から思いがけず飛び出してしまい、花子を驚かせた。この場合、飛び出したことの原因は意図だが、意図的に飛び出しとは言いたくないという直観がある。しかし、従来の理論では、太郎が飛び出したことは意図的行為だということになる。なぜなら、従来の理論では、意図が原因ならば意図的行為であるということが前提にされているからである。

こうした批判を受けて、J・サールは「意図」を「先行意図 (prior intention)」と「行為内意図 (intention in action)」に分けて考える (Searle 1983)。先行意図は「～することに決める」と表現され、行為内意図は「～している」と表現される。この二つの意図概念を使えば、上述の三つの批判に答えることができる。一つ目の批判に対しては、会釈の事例は、先行意図は持っていないが、行為内意図を持っているため、意図的に行為したケースだと説明できる。二つ目の批判に対しては、行為内意図を導入したため、行為が始まってから完了するまでの期間にもより注目するようになったと説明できる。三つ目の批判に対しては、逸脱因果の事例では行為内意図が欠けているため意図的行為ではないと説明できる。

ところが、サールの導入した「行為内意図」に対して反論する哲学者がいる。それが、H・ドレイファスである。ドレイファスは、行為内意図なしに起こる意図的行為が存在すると主張する。そのような事例として、ドレイファスは熟練した活動 (熟練者がスキーをする) などを挙げる (Wakefield & Dreyfus 1991)。一方で、行為が意図

的であるためには行為内意図によって引き起こされていることが必要だと主張するサールは、熟練した活動などにも行為内意図は存在していると応答する (Searle 1991)。

そこで、本発表は、サールの主張とドレイファスの主張のどちらが正しいのかを問う。そのために、サールとドレイファスの間でなされた議論をいくつかの論点に分けて整理し、それぞれの主張の根拠を明確化し、二人がどのような直観を背景に対立していたのか、あるいは対立していなかったのかを示したい。そのような作業を通じて、意図とは何なのかということだけでなく、行為内意図をめぐるサール・ドレイファス論争とは結局何だったのかということや、この論争からどのような教訓を引き出せばよいのかということについても考察することになるだろう。

#### 参考文献

- Davidson, D. (1980), *Essays on Actions and Events*, Oxford University Press.
- Lepore, E. & Gulick, R. V. (eds.) (1991), *John Searle and His Critics*, Blackwell.
- Searle, J. R. (1983), *Intentionality: An Essay in the Philosophy on Mind*, Cambridge University Press.
- (1991), “Response: the background of intentionality and action,” in Lepore & Gulick, 289-299.
- Wakefield, J. & Dreyfus, H. (1991), “Intentionality and the phenomenology of action,” in Lepore & Gulick, 259-270.